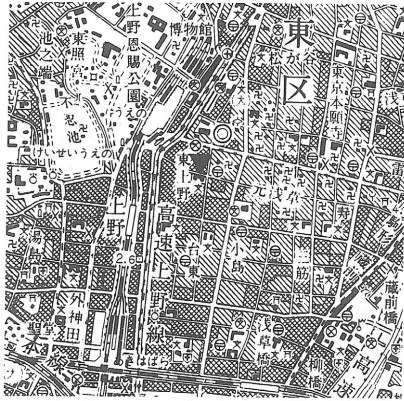


東京・西町遺跡 にしまち

- 1 所在地 東京都台東区東上野一丁目
- 2 調査期間 一九九九年(平11)八月～二〇〇〇年四月
- 3 発掘機関 台東区文化財調査会
- 4 調査担当者 小俣 悟
- 5 遺跡の種類 武家屋敷跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代、明治時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部)

西町遺跡は台東区の西より、武蔵野台地東端上野台の東方に位置し、東京低地西側に立地する。本調査は、病院新築に伴う事前調査である。

当地周辺は、近世以前には湿地が広がっていたものと思われ、江戸時代に整地されて柳川藩立花家などの武家地が成立している。調査地は、近世の絵図では大縄地や旗本屋敷が確認されるが、主として幕臣鈴木氏

の敷地だったと思われる。明治には民有地となり、その後、一九二三年(大正二)頃に西町小学校地となった。

遺構は、近世前半の大溝・土坑、近世後半の土蔵基礎・池・木樋、更に近代の建物基礎などを検出した。遺物は大溝・池などから、漆器碗・桶・板材などの木製品、中国・ヨーロッパ製及び志野・織部・鍋島様式などの陶磁器、三つ葉葵紋の瓦などが大量に出土した。当地は、主として一八世紀から屋敷地として利用されたようである。木簡(1)が出土した一六号遺構は、一八世紀前半頃廃棄の土坑である。

8 木簡の积文・内容

一六号遺構

(1) 様 260×(60)×5 081

近世包含層

(2) 醬油 径430×厚23 061

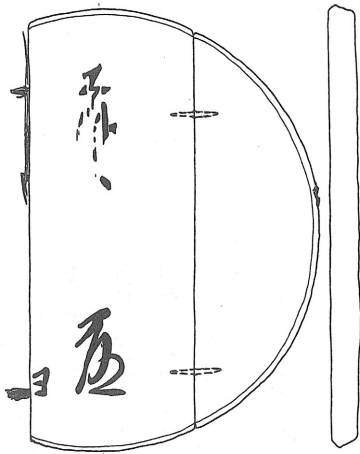
(3) 藤日 径430×厚26 061

(4) 径(320)×厚23 061

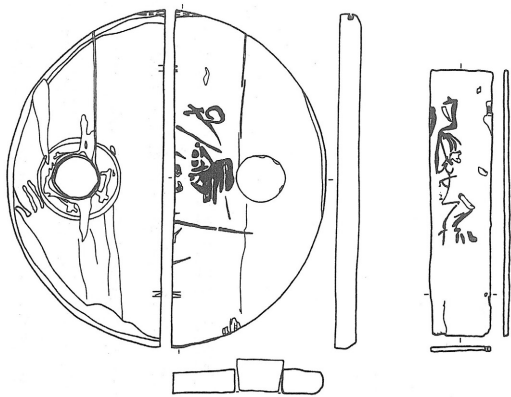
(1)は左側を欠損する。右側の上下に小穴が見られ、木製品を木簡



(2)



(3)



(4)



(1)

に転用している可能性もある。(2)~(4)は円盤状で、桶蓋と推定される。(2)は醤油樽の蓋。(3)の墨書は名前と日付か。贈答用とも思われる。(4)は左側を欠損するが、片面に墨書、反対面に焼印が見られる。焼印捺印後に穿孔されて栓がなされており、再利用されていると推定される。墨書がいつの時点でなされたか不明であるが、栓を避けているように見える。両面共に丁寧仕上げられているが、焼印がある面が当初の表面である可能性が高い。穿孔は焼印の○枠内のほぼ中央になされ、焼印を意識しているようにも見える。焼印は穿孔によって欠損し不明瞭だが、○枠内に三角形を三つ、あるいは井

桁を描いていると思われる、商標と推測される。墨書は天地の向きも不明瞭で、横方向の三行の文字列の最下段部分が見えている可能性もある。

その他、明治時代の遺構から、桶の側面に墨書・焼印があるもの二点が出土している。いずれも墨書は判読不能である。焼印は一点には、「皇国最上／小栗全□」「麗／□」の二つが捺されていた。もう一点には「精□／□豆」とあった。これら以外にも、桶蓋に「十」と刻んだものなどが出土している。

釈読には、坪井利剛・平野恵氏のご教示を得た。(小俣 悟)